ISSN 0919-4339

九州大学
大学史料室ニュース

第14号　1999.10.30

目　次

北部九州の古人骨…… 2
「九州大学の歴史」「大学とは何か－ともに考える－」の授業について－大学史・大学論の意義－…… 4
九州大学大学史料室名簿…… 6
受贈図書一覧…… 6
大学史料室日誌抄録…… 8

医学部附属医院第一外科より合同内科を望む(1936年)

1936年（昭和11）11月、九州帝国大学創立25周年を記念して作製された絵葉書の中の１枚である。医学部は1925年（大正14）に２度の大火に見舞われ、以後教室及び附属医院の復旧を急いだが、1931年（昭和６）４月、先ず第一～第三内科のいわゆる合同内科棟（写真左上）が竣工した。次いで竣工したのが、1933年１月の第一外科棟（写真右）である。医学部では1937年５月、これも新装なった中央講堂において第１期工事の落成祝賀会を挙行した。写真にうつる合同内科、第一外科建物は病院地区を代表する建物で、ともに現存している。

北部九州の古人骨

永井昌文

九大医学部解剖学教室には古人骨が多数保管されている。多くは戦後の出土のもので、戦後昭和25年台北帝大から着任された金関丈夫教授の卓見と努力によるものが多い。中でも我が日本人の成立に関して多大な影響を及ぼしたと考えられる弥生時代人骨の収集は圧巻であり、日本にこれほど所蔵されている処はない。

比較的多数例が得られた遺跡名を挙げると、広田（鹿児島県種子島）、金隈（多数の甕棺遺跡。福岡県）、三津永田（佐賀県）、土井ヶ浜（山口県）等がある。

これらの蒐集は今までの処、特に計画的に集められたものではなく、いわば天地人の利によって、戦後の天の時（国土計画・文化財保存法）、大陸に最も近いという地の利、人の和によって自ずと集まってきたものである。

これらの全貌は小生の退官に際し、九州大学医学部解剖学第二講座所蔵古人骨資料集成に纏められているので、この際、人骨採取の諸事情を述べてお世話になった方々への御礼に替えたい。また後々のために関係の挿話を附記しておく。

昭和43年の夏、Harvard大学のW.W.Howells教授がこの蒐集標本の研究に来られた。生憎この年は大学紛争の最も活発な年で、その前に問い合わせがあった時、左様お伝えしたのであるが、先方の都合もあって予定通り夫人同伴でやって来られた。正門から教室まで案内するときに構内の所々に屯する機動隊の姿を見て、「彼らは何か」と尋ねられたので、「警官です」とお答えをしたら、「兵隊みたいだね」と言われて恐縮した。機動隊の戦闘服がものものしかったのであろう。

教室の名誉教授室にご案内して、先ずはじめに三津永田人骨をお見せしたら、各頭骨の復原の具合を慎重に検討した上で、計測に移られ、夫人は傍らでその数値を記録して居られた。10日ほどの滞在であったが、その間、時が時とて何のお構いも出来なかったことを今でも残念に思う。世界的古人類学者のお目にとまった上に、資料として認定いただいたことは幸いであった。丁度「飾り山笠」の時節とて市内を案内して歩いた。

昭和48年頃だったと思うが、平凡社の雑誌「太陽」の編集部から弥生時代の甕棺の写真を土門拳氏に撮影して貰うからとの連絡があり、高名な写真家がどんな撮影をされるかと期待して待っていた。

助手一人を連れて来られて教室の奥の解剖実習室の付近で撮って貰ったが、露出計を手に日がな一日腰を据えて眺めて居られる。日陰に甕を据えて、雲の動きを待って居られるらしい。関東では見られない弥生時代の手造り大甕の素朴な肌合いを睨んで居られるのだ。北部九州の花崗岩の風化土壌マサに埋められた弥生土器独特の色合いと造形に精魂を傾けて居られたらしかった。

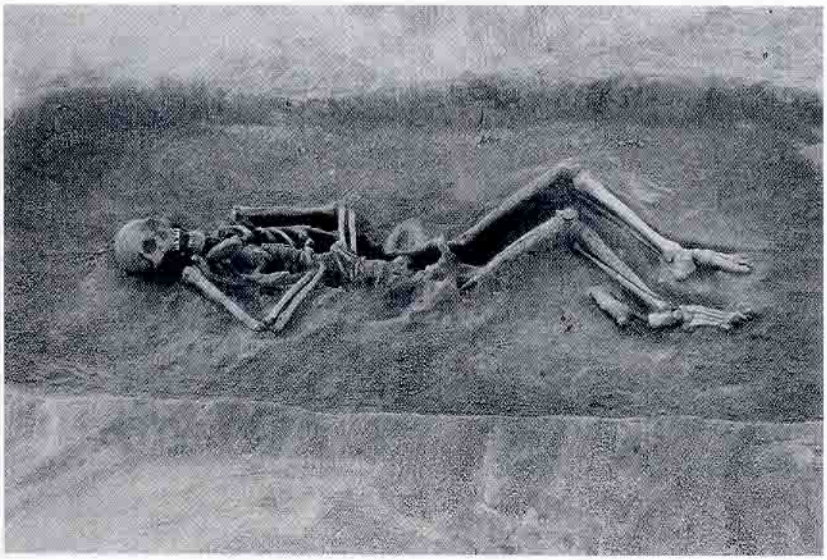
今全国的に有名な吉野ヶ里遺跡に近い三津永田遺跡は昭和28年の発掘で素環頭の鉄製太刀や漢鏡を伴いその重要性が識者に認識され、金関教授に報告が来た。もともとこの年の大洪水で背振山系南麓の川が氾濫し、その復旧工事に当って同じ山系の舌状台地からの採土工事の際に出土した埋葬遺跡である。

今でこそ各県に文化財調査のための要員が常駐しているが、文化財保護法制定（昭和25年）の頃は未だ、重要な緊急調査はどう手がけるべきか、各県当局は手慣れぬ状況にあった。あまつさえ遺物ならともかく古人骨となると何処もその取り扱いに困惑していた。本来人骨も人間の遺物には違いないが、古い人骨は犯罪に関係なければそれまでは遺失物法で取り扱われていた。

かねて確実な弥生時代の人骨入手を希望しておられた金関教授には願ってもない幸いであった。当時の助手牛島陽一氏と小生に収容の役目が回ってきたのである。出土物は置き場に困って佐賀県の肥前療養所（精神病院）に取りあえず預けてあった。ところが戦後間もなくの事とて、運ぶ車もないし、道路も非常に荒れていた。

九大病院に無理を言い、運転手付きのトラックを出して貰った。今は一時間くらいで行けるが、人骨だけでなく容器の甕棺も一緒に持って来いとのことで、両方ともワレ物であるから荷台に同乗し、縄を張り巡らして接触を防ぎ、徐行して貰った。国道も誠に道が悪かった。

ようやく持って帰ったら甕棺も復原せよとの命令だ。人骨なら医学部助手の役目上止むをえぬが、土器の復原は考古学の仕事である。「土器接ぎ」は慣れるとジグソーパズルみたいで面白いところもあるが、非常に根気がいる。金関教授によると「関東ではなかなか手に入らぬものだから大事にせよ」とのことで渋々やった。



土井ヶ浜人骨

幸い解剖実習室は広いタタキで水洗いも土器接ぎにも都合が良かった。それでもやりあぐねていると、明大の学生（板付遺跡の発掘調査を手伝いに来ていた考古学の学生）に手ほどきを受け、砂箱や洗濯鋏の効用を教わった。これらの土器は、現在本学考古学研究室に移管してある。

昭和45年朝日新聞社の企画で「弥生人展」が行なわれた。当初は昭和40年発掘の「立岩遺跡」の発掘成果（前漢鏡等を出土）に基づいて弥生時代展を行なうつもりであったが、資料を集めているうち弥生時代人骨が沢山あることが目に止まり、もっと生活の臭いのするダイナミックな「弥生人展」にしてみてはということになった。それまで東京のデパートでは西洋美術館からの借り物展が一段落し、少し目先を変える必要があったらしいのである。

弥生時代の人骨は九大に最も豊富に集まっていたから、私は九州山口の壮年の男性40体の上京をもくろんだ。弥生人の特徴を一見して理解して頂くために、ハンガーボードに夜店の「面売り」のごとく掛け並べる工夫をしていたので、できあがったばかりの懸架具に並べて写真を撮り、実際展示もした。

この展観は皇族方も来られて面目を施したが、小・中学生の評判が大変で、「多くの人骨はなぜ顔が赤いのか」などと単刀直入な質問もあって、新聞にはその理由を書かされた。

あとで東大人類学教室の鈴木尚教授には「君があまり良い展観をやるから困ったよ」とその後に続いて行なわれた「縄文人展」（科学博物館が主に協力した）の苦労話をされた。

次に日本の古人骨で最も保存の良い土井ヶ浜人骨について書かねばならぬ。

この人骨は山口県の日本海岸の風成砂丘に埋葬されたものであるが、砂に貝殻の微粉を含んで、人骨の保存には好条件であり、またそれ故に土建材としてはセメント造りには不向きで戦後の採砂を免れていたのである。人骨の保存状態では骨質のカルシウム分がよく残り、北部九州の甕棺人骨がスカスカであるのに較べて最もしっかりしている。戦前からこの遺跡近辺から人骨の出土はあったのであるが、所属時代を推定する決定的証拠に乏しく、元寇の時のものとか、古墳時代のものとかの諸説があった。

ところが昭和28年の人骨出土を機に九大と日本考古学協会と共同で発掘調査を行なった結果、弥生土器片や貝製品出土などで弥生人骨であることが確定し、「国の史跡」に指定されその後も調査は続行されている。

（九州大学名誉教授）

〔付記〕
写真は、中橋孝博教授（大学院比較社会文化研究科）の提供によるものである。謝意を表します。

教育事例紹介

「九州大学の歴史」「大学とは何か－ともに考える－」の授業について－大学史・大学論の意義－

折　田　悦　郎

1997年（平成９）の後学期から、全学共通教育科目（選択科目）として、「九州大学の歴史」の授業を行っている。国立大学でのこのような取り組みは従来殆ど行われて来ず、九州大学での試みがおそらくは最初のものだと思われる。全学教育のあり方が問い直されつつある現在、九大での実情をお知らせすることも無意味なことではないだろう。一つの事例報告として記してみたい。

「九州大学の歴史」の開講日・時限は、毎週金曜日５限（於六本松地区）。対象学年は１・２年生を中心に３・４年生でも可とした。昨年度からは、「低年次教育における九州大学史カリキュラム開発に関する研究」というテーマの共同研究が、九州大学教育研究プログラム・研究拠点形成プロジェクト（研究代表者：新谷恭明大学史料室長/人間環境学研究科教授）、いわゆるＰ＆Ｐに採択されたので、Ｐ＆Ｐ活動の一環としても試行的に授業を行っている。試行授業に入ってからの３学期間の受講生は、合計157人で、部局別では歯47、農33、工27、理20、経11、文６、法６、育３、医４。学年別では１年生143人、２年生13人、４年生１人。男子学生７に対して女子学生３の割合である。授業内容（テーマ）は、以下のようである。

*高等教育制度の概説Ⅰ/同Ⅱ/同Ⅲ
*九州大学前史（福岡医学校・福岡県立病院・京都帝国大学福岡医科大学）
*九州帝国大学の創設（工科大学の創設）
*農学部・法文学部
*旧制福岡高等学校
*福岡県下の高等教育機関（西南学院高等学部・福岡女子専門学校・明治専門学校・九州医学専門学校・九州歯科医学専門学校）
*理学部・教育学部
*薬学部・歯学部・九州大学の現況
*キャンパス見学

最初の「高等教育制度の概説」に時間をかけるようにしたのは、受講生が帝国大学や旧制の高等学校・中学校・専門学校についての知識を殆ど持たず、これらを踏まえなければ、九大の創立自体についても理解することが難しかったからである。毎回、最後の15分間で授業に関する感想や質問を書いて貰い、レポートで成績評価を行った。授業方法等についての感想・要望のうち、良かった点として、「自分の大学の歴史を知ることで大学に愛着がわき、誇りが持てるようになった。」、「毎回資料や写真が配布され面白かった。」、「九大史だけではなく、地域の歴史や他大学の歴史についても学べた。」、「箱崎キャンパスの見学は良かった。建物等を直接見て学習出来、講義内容がより身近に感じられた。」、「自分の大学の歴史を低年次に学ぶのはこれからの大学生活に役立つと思う。」、改善点として、「箱崎キャンパスだけでなく病院地区も見学したい。」、「ゼミ形式にして調べたり発表する機会を設けて欲しい。」、「九大の研究状況についてもっと知りたい。」、「１年間の講義にして欲しい。」、「授業計画（シラバス）・教科書があるとよい。」といったものがあげられている。

授業全体を通じて受講生が興味を持ったテーマといえば、①自分の所属する学部の歴史、②医科大学創設についての福岡・熊本間の大学誘致合戦、③九州帝大各学部の創設にあたって、福岡県・福岡市・財界からの多大な寄付が行われたこと、④「学徒出陣」や「大学紛争」に代表されるように、時代によって学生生活に大きな違いがあったこと、等であろう。いずれも大学と社会との関係、大学をめぐる時代状況と深く関係したテーマである。

その外、授業で工夫をしたところでは、キャンパス見学、ビデオ鑑賞会、講演会の開催がある。キャンパス見学は前学期の最終日に行った。ビデオ鑑賞は九大に関する適当な作品が無かったので、新制大学移行直前の松山高等学校（旧制）を舞台にした「ダウンタウンヒーローズ」（山田洋次監督）をみた。最後に主人公が新制九州大学の法学部を受験するというこの映画は、大変に好評だったと思う。「昔の学生は何事に対しても自分の考えを持ち、自分の意見を主張していた様に思う。」、「当時の高校生が活動的だったし、一人一人がすごく個性的だった。」、「いかにドイツ語が学生達に親しまれ使われていたかがよく解った。」等の感想が寄せられた。また本年１月の授業では、神奈川大学の中山茂教授に「帝国大学の創立と展開」という演題で講演をしていただいた。

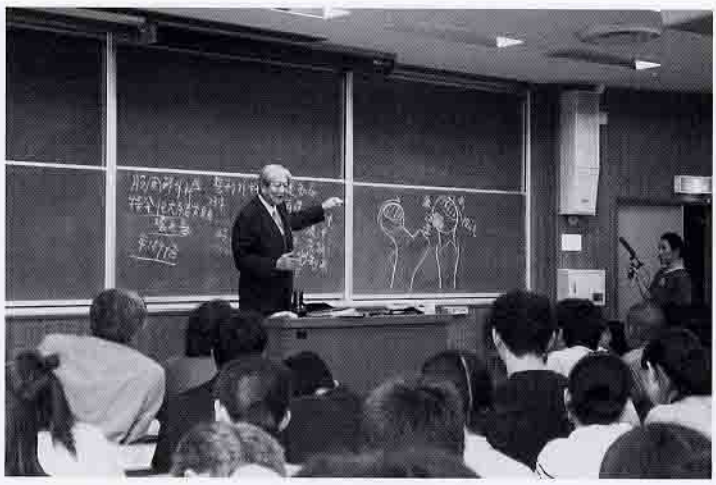
ところで、九大における大学史の授業は今後も継続される予定であるが、改善すべき点も少なく

はない。中でも受講生からの要望として、九大史だけではなく、よりグローバルな大学史・大学論の授業を望む声が出されたことには是非とも触れておきたい。実はこのような意見は、P＆P共同研究分担者の中からも出されていたことであり、本年4月からは分担者等11名による総合科目、「大学とは何かーともに考えるー」（オルガナイザー：新谷・折田）が開講されている。

*「大学とは何か」総論（新谷教授）
*大学の歴史（吉岡斉教授<比文>）
*国際的視点から見た日本の大学（同上）
*帝国大学の歴史的役割と九州大学Ⅰ－総論（折田）
*同上Ⅱ－京城帝国大学と九州帝国大学（松原孝俊教授<言文>）
*同上Ⅲ－大学と産業界のつながり（森祐行教授<工院>）
*私立大学（新谷教授）
*日本における大学の自治（荻野喜弘教授<経>）
*学際化と大学（有馬學教授<比文>）
*地域社会と大学（東定宣昌教授<石炭研>）
*情報化社会と大学（久米弘助教授<人環研>）
*国際交流と大学（権藤與志夫名誉教授）
*九州大学の現状と将来（杉岡洋一総長）

このプログラムからもわかるように、最後の2コマは名誉教授の先生と総長にそれぞれ講義をお願いしたが、同科目は受講希望者が560人と大変に多く、教室の関係で約300人に人数制限をせざるを得なかった。なお、後期には授業の一環として、「大学における低年次教育の意義－試行授業を行ってー」のテーマでシンポジウムも行う予定である（11月17日。於六本松地区。コーディネーター＝新谷教授。話題提供者＝寺崎昌男桜美林大学大学院教授・押川元重大学教育研究センター教授・折田）。

最後に大学史・大学論の授業を担当しての感想を少し記しておきたい。私たちが上述のような授業を始めた直接の目的は、偏差値のみを基準に入学して来る学生たちに対して、自らの大学の歴史を学ばせることにより、アイデンティティの確立とモチベーションの喚起を促すとともに、低年次教育への貢献をなすことにあった。私自身、このようなプログラムのもとで試行授業を担当しているが、しかし最近では、教官・学生を問わず、大学人としてのアカウンタビリティ、そのための基礎史料・基礎作業としての大学史の授業を意識するようになって来た。情報公開時代と言われる現在、大学にある人々がそれぞれの立場から、歴史を踏まえて責任ある説明をすることは、公的機関である国立大学の責務であろう。そのためには当然、大学史料室等における史料の収集、大学史の研究が大きな前提となる。と同時にここではまた、最近の自己点検・評価の動向を考えると、「良い沿革史を出しているか、大学資料の保存のための努力を払っているか」ということが大学の自己点検・評価の基準に想定されるべきであるという、寺崎昌男桜美林大学大学院教授（東京大学名誉教授）の言説も想起しておくべきかも知れない（寺崎「大学史の意義を考える」『愛知大学史紀要』1）。


「大学とは何かーともに考える－」の授業風景（杉岡洋一総長）

いずれにしろ大学が新しい時代を迎え、より国際化・流動化しようとすればするほど、大学の中核としての大学史・大学論の意義は逆に大きくなって行くだろう。その意味で大学史・大学論の授業は、大学教育のあり方を考えるときの好個の素材である。「九州大学の歴史」「大学とは何かーともに考えるー」は、今述べた大学史・大学論の持つ重要性からすればその一部を担うものに過ぎないが、今後の全学共通教育にとって何らかの参考になれば幸いである。

（大学史料室専任講師）

〔付記〕
*昨年度の九州大学における授業の概要・学生の感想等については、本年3月に『試行授業「九州大学の歴史」に対する学生の反応について』（新谷・折田編、A4判、110頁）にまとめた。
*本文は、「九州大学の歴史を担当してー大学史・大学論の意義ー」（九州大学大学教育研究センター「九州大学教育情報」4、1999年3月）をもとに、加筆・補訂したものである。転載をお許しいただいた大学教育研究センターに謝意を表します。

九州大学大学史料室名簿

室　長	人環研	教授	新谷　恭明
専　任		講師	折田　悦郎
兼　任	文学部	助教授	佐伯　弘次
〃	法　院	教授	植田　信廣
〃	経済学部	教授	荻野　喜弘
兼　任	比文研	教授	有馬　學
〃	石炭研	教授	東定　宣昌
事務補佐員			馬場　恵
〃			筑紫　啓子

(1999年8月1日現在)

受贈図書一覧（1998年10月～1999年6月）

九州大学歯学部歯科保存学第一教室　開講二十周年記念誌　青野正男教授就任二十周年記念
　九州大学歯学部歯科保存学第1教室開講20周年記念事業準備委員会　1987. 6

青野　正男　教授退官記念業績集
　青野　正男教授退官記念事業会　1991. 2

ボルドー物語　ワインの都市の歴史と現在
　神田慶也編訳　1998. 9

YUSHO A Human Disaster Caused by PCBs and Related Compounds
　Masanori Kuratsune et al.

Japan-U.S. Joint Seminar on "Toxicity of Chlorinated Biphenyls, Dibenzofurans, Dibenzodioxins, and Related Compounds"; Nishitetsu Grand Hotel, Fukuoka, Japan April 25-28, 1983
　The Japan-US Cooperative Science Program

倉恒匡徳教授業績集
　倉恒匡徳教授退官記念事業会　1984. 4

ただ一筋に　栗山捨三先生追想集
　栗山捨三先生追想集刊行会　1982. 8

Fact, Feeling and Creation
　Motowo Takayanagi

ザ合繊「栄輝」の開発
　もと興人・佐伯"ごうせん"グループ

流れに抗して
　斎藤文男　1996. 3

九州大学名誉教授松本達郎業績目録（1986年－1996年分）
　勘米良亀齢［ほか］　1997. 3

Vulpes（九州野生動物研究会誌）小野勇一教授退官記念号　第13巻1/2号
　九州野生動物研究会　1994. 4

西村光雄教授退官記念誌
　西村光雄教授退官記念事業会　1995. 4

立田栄光教授退官記念誌
　立田栄光教授退官記念事業会　1991. 4

芳賀　忞先生を偲ぶ
　芳賀　忞先生・渡辺泰州博士を偲ぶ会　1988. 9

桑原万寿太郎教授退官記念
　九州大学理学部生物学教室内桑原万寿太郎教授退官記念事業会

森田弘道教授退官記念誌
　森田弘道教授退官記念事業会　1989. 5

松田博嗣教授退官記念　和文論集
　松田博嗣教授退官記念事業会　1995

ネットワーク社会に向けて
　松田博嗣教授退官記念事業会　1991. 4

えびの高原野外生物実験室　研究業績　第1号
　九州大学理学部生物学教室　1973. 11

向井輝美先生の思い出
　向井輝美記念会　1990. 12

Terumi Mukai Selected Papers on Population Genetics
　Department of Biology Kyushu University

九州大学理学部生物学科・生体高分子学講座及び九州大学大学院医学系研究科分子生命科学専攻・生体機能素子学講座（協力）　研究業績及び記録　昭和53年－平成8年

天草の海辺の日々　九州大学理学部附属天草臨海実験所　菊池泰二教授　退職記念誌
　菊池泰二　1997. 10

九州大学歯学部同窓会広報　第30号～第31号
　九州大学歯学部同窓会　1998. 12、1999. 3

同窓会会員名簿　1998（平成10年度）
　九州大学歯学部同窓会

甲寅会誌　第六二号
　甲寅会　1998. 11

展望　創刊号～第二号、第四号～第六号
　九州大学展望編集部　1957. 7、1957. 12、1959. 6、1960. 5、1961. 5

松の実　第33号
　九州大学女子卒業生の会（松の実会）
1998.10
福岡県公共図書館郷土資料総合目録　追録10　平成10年度版
　福岡県立図書館　福岡県公共図書館等協議会
1998.11
学習院大学五十年史ニュース　第４号
　学習院大学五十年史編纂室　1999. 3
神奈川大学史資料集　第十五集
　大学資料編纂室　1999. 3
ニューズ・レター　№10
　金沢大学50年史編纂室　1998. 8
関西大学年史紀要　第十一号
　関西大学年史編纂委員会　1999. 3
関東学院史資料室ニューズレター　創刊号
1999. 6
学院史料　Vol.16
　神戸女学院史料室　1998. 8
校史　Vol. 7～Vol. 8
　國學院大學校史資料課　1998.10、1999. 3
東京経済大学沿革資料 第一集
　東京経済大学100年史編纂委員会　1999. 2
東京大学史史料室ニュース　第21号
　東京大学史史料室　1998.11
東北大学記念資料室資料目録　仙台医学専門学校資料目録
　東北大学記念資料室　1999. 3
東北大学記念資料室だより　創刊号
　東北大学記念資料室　1998.10
サティア《あるがまま》　第32号～第34号
　東洋大学井上円了記念学術センター
1998.10、1999. 1、1999. 4
名古屋大学史資料室ニュース　第６号
　名古屋大学史資料室　1999. 3
名古屋大学史紀要　第七号
　名古屋大学史資料室　1999. 3
成瀬記念館　1998　№14
　日本女子大学成瀬記念館　1998.12
日本女子大学学園史ニュース　第２号
　日本女子大学成瀬記念館　1999. 3
広島大学史紀要　第一号
　広島大学五十年史編集室　1999. 3
法政大学史資料集　第二十一集　法政大学と戦後五〇年　資料篇一
　法政大学戦後五〇年史編纂委員会　法政大学大学史資料委員会　1998. 3
法政大学史資料集　第二十二集　法政大学と戦後五〇年　資料篇二
　法政大学戦後五〇年史編纂委員会　法政大学大学史資料委員会　1999. 3
北海道大学125年史編集室だより　第１号
　北海道大学125年史編集室　1999. 3
宮城学院最近10年小史　1987－1996
　宮城学院最近10年小史編集委員会　1998. 3
宮城学院資料室年報『信・望・愛』　第５号
　宮城学院資料室運営委員会　宮城学院資料室
1999. 3
立命館百年史紀要　第七号
　立命館百年史編纂室　1999. 3
京都大学百年史　総説編
　京都大学百年史編集委員会　1998. 6
神奈川大学70年のあゆみ
　大学史編纂・記念誌編集実行委員会
1998.11
学習院大学の50年　写真と図録
　学習院大学大学五十年史編纂委員会
1999. 5
実践女子学園創立100周年記念写真集
　創立100周年記念事業100年史編纂委員会
1999. 5
立命館百年史　通史一
　立命館百年史編纂委員会　1999. 3
記念館だより　第16号～第18号
　旧制高等学校記念館　旧制高等学校記念館友の会　1998.10、1999. 2、1999. 6
大学史紀要　紫紺の歴程　第三号
　明治大学大学史料委員会　1999. 3
歴史編纂事務室報告　第二十集　明治大学の大学史料
　明治大学総務部歴史編纂事務室　1999. 3
大学アーカイヴズ　№19～№20
　全国大学史資料協議会　東日本部会
1998.10、1999. 3
全国大学史資料協議会西日本部会会報　第５号、第６号
　全国大学史資料協議会　西日本部会
1998. 9、1999. 5

〔凡 例〕
一覧所収にあたっては図書類を中心とし、論文等の別刷やコピー類については、省略した。

大学史料室日誌抄録（1999年１月～６月）

1.13（水）　二見剛史鹿児島女子大学教授より史料寄贈。

1.21（木）　第21回大学史料室運営委員会開催。
根本實工学研究科教授、俣野仲次郎弾性工学研究所元教授の件につき、史料調査のため来室。

1.22（金）　「九州大学の歴史」の一環として、中山茂神奈川大学教授による「帝国大学の創立と展開」講演会開催（於六本松地区）。

1.28（木）　第19回九州大学史料収集・保存に関する委員会開催。
平成11年度教官定員運用要望書提出。

2. 1（月）　兼任教官発令（～2001.1.31）。
佐伯弘次文学部助教授
新谷恭明人間環境学研究科教授
植田信廣法学研究科教授
有馬學比較社会文化研究科教授
東定宣昌石炭研究資料センター教授

2. 8（月）　西日本新聞社記者、史料調査のため来室。
岩橋文吉名誉教授より史料寄贈。

2.10（水）　国際交流課より史料受領。
六甲出版より史料寄贈。

2.17（水）　京都大学百年史編集室・同総務課より、視察のため来室。

2.19（金）　折田講師、広島大学50年史編集室研究会に於いて「大学史編纂と資料収集・保存のあり方について」講演。

2.22（月）　退官予定教官へ史料寄贈依頼文書発送。

3. 8（月）　ＮＨＫ福岡放送局より戦前期九州帝国大学の件につき照会。

3.19（金）　中山正敏理学部教授より史料寄贈。

3.24（水）　岡山繁樹理学部教授より史料寄贈。
國武豊喜工学研究科教授より史料寄贈。

3.26（金）　平成12年度概算要求書事項表提出。

3.29（月）　竹松正樹応用力学研究所教授より史料寄贈。
学務部より女子寮看板受領。

3.31（水）　『大学史料叢書』第７輯、『大学史料室ニュース』第13号、『九州大学関係史料目録』、『試行授業「九州大学の歴史」に対する学生の反応について』、『ARCHIVES OF KYUSHU UNIVERSITY 九州大学大学史料室』（パンフレット）刊行。

4. 3（土）　高田健次郎理学研究科元教授より史料寄贈。

4. 7（水）　木村京子氏より史料寄贈。

4. 9（金）　神田慶也元学長より史料寄贈。

4.14（水）　大学史料室兼任教官等による1999年度前期全学共通教育科目（総合科目）「大学とは何か－ともに考える－」開講。

4.15（木）　第22回大学史料室運営委員会開催。

4.16（金）　折田講師、1999年度前期全学共通教育科目（周辺教養科目）「九州大学の歴史」開講。
学務部学務課より史料受領。

4.22（木）　第20回九州大学史料収集・保存に関する委員会開催。
平成11年度大学史料室振替要求書提出。

4.30（金）　平成12年度概算要求各部局説明聴取（新谷恭明委員長出席）。

5. 1（土）　兼任教官発令（～2001.4.30）。
荻野喜弘経済学部教授

5.13（木）　秦明夫氏より史料寄贈。

5.31（月）　予算経理委員会開催（新谷恭明委員長出席）。

6.22（火）　評議会開催（平成11年度大学史料室予算決定）。

九州大学大学史料室ニュース　第14号

Archives of Kyushu University

発行日　1999年10月30日（年２回刊）
編集
発行　九州大学大学史料室
〒812-8581 福岡市東区箱崎６－10－１
電話・FAX　(092) 642-2292
印刷　㈱ミドリ印刷